

# 学長挨拶

池端 雪浦

(東京外国語大学学長)

2002年度から開始された文部科学省の「21世紀COEプログラム」は、我が国の大学に、世界最高水準の研究教育拠点（Center of Excellence）を学問分野毎に形成し、研究水準のいっそうの向上と世界をリードする創造的な人材の育成をめざしています。本学は、「人文科学」と「学際・複合・新領域」の2つの学問分野にそれぞれ1件の申請を行い、人文科学では「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」、学際・複合・新領域では「史資料ハブ地域文化研究拠点」が採択されるというすばらしい結果をえました。本学大学院地域文化研究科の、個性ある研究教育のポテンシャルが高く評価されたことを嬉しく思います。これら二つの拠点は、言語研究と地域文化研究における世界的な教育研究拠点を目指そうとする本学の将来構想の主要な推進力・両輪であると考えられています。

この2つの拠点を全学的見地から支援するために、学長直属の「21世紀COEプログラム運営室」を設置しました。この運営室は、学長、副学長、研究科長、拠点リーダーをはじめ、大学院を支える学部ならびにアジア・アフリカ言語文化研究所の長、さらに事務局長以下事務局幹部から構成され、部局横断でかつ事務局・教員が文字通り一体となった組織です。運営室は、拠点の支援のために学内諸組織間の連携体制を構築するとともに、総計300平米におよぶスペースの提供や在外調査研究旅費などの学内予算措置をはじめとする支援を行ってきました。

「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」は、近年めざましい発展を遂げた情報工学と言語学ならびに言語教育学の3専門分野を有機的に統合して、言語情報学という新しい学問領域を創成することです。それによって、膨大な言語運用データの集積とその分析に基づいて、言語運用の実態を解明する言語研究の新分野を切り開き、その成果を言語教育学へ応用していくことがめざされています。また大学院生の教育面では、インターネット上の言語資源情報の収集・評価・分類や、TUFS言語モジュールの開発、多言語コーパスの解析・処理などに大学院生を参加させることによって、言語資源情報について深い理解をもち、音声学・言語学の知識やコンピュータ技術に精通した人材を育成すること、また、現地でのフィールド調査に当たらせることで、フィールドワーカーとしての訓練を行っています。

「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」は、本学がかつて経験したことのない、いくつもの新しい挑戦をおこなってきました。その1つは、先に言及した言語学、言語教育学そして情報工学の3専門分野が協働して言語情報学という新しい学問領域の創成に取り組んだことです。2つは、本プログラムは実に多くの教員、研究者、大学院生、ポスドク研究

者らの参加と協力をえて、進められてきたことです。プログラム事業への協力者は学内のみならず、海外の研究者をはじめとして多くの学外研究者を含んでいました。3 つは、国際シンポジウムやワークショップ等を通して、あるいはまた大学院生やポスドク研究者の海外での学会発表等を通して、本学の研究活動の国際化が大きく前進したことです。本プログラムの研究成果がオランダの John Benjamins から「言語運用を基盤とする言語情報学 (Usage-Based Linguistic Informatics)」の叢書として出版されていることも、その一環と言えるでしょう。

4 つは、本プログラムの中心的活動の 1 つである TUFSS 言語モジュールの開発では、研究成果がただちに web 上に公開され、学外の外国語教育者のオープンな外部評価を受けて、改善されるという手法がとられてきたことです。そして 5 つは、大学院生の教育において、「研究活動を通じての教育」が、これまで以上に積極的にとりくまれるようになったことです。

こうした新しい挑戦によって、言語情報学拠点のプログラムは研究・教育の両面において、多くのすぐれた成果をあげてきたと私は考えております。これらの成果は、リーダーである川口裕司教授の卓越した献身的リーダーシップと、プログラムの中心的担い手である本学教員、大学院生ならびにポスドク研究者らの骨身を惜しまぬ協力によるものであり、本学はそれを誇りに思っております。

2006 年度は COE プロジェクトの最終年度になります。最終目的に向かって推進メンバーの方々がさらに精力的にプロジェクトに取り組み、大きな研究成果をあげ、言語情報学拠点から次世代のわが国の言語研究と外国語教育を担う人材が多数輩出されることを願ってやみません。21 世紀 COE プログラムの成功のために、本学の叡智を結集し、大学全体として協力してゆく所存です。

2006 年 9 月 1 日